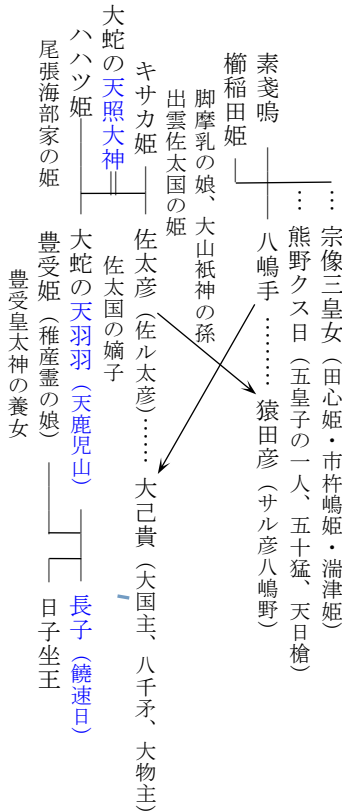


『古事記』、「櫛稲田姫をもちて、隠所くみどを起こして、生める神の名は、八島やしま士奴美神しぬみと謂う」

『日本書紀』、「(素戔嗚尊)、遂に出雲の清地すが(須賀)に到ります。彼処に宮を建つ。・・・、然して後に、素戔嗚尊、櫛稲田姫に生ませたまえる児を大己貴と号す。・熊成峯に居しまして、遂に根国に入りましき」、

☆須我神社(雲南市大東町須賀)は、須佐之男命・稲田比売命・狭漏彦八島野命を祭る。



◆葦原中つ国 大己貴が杵築国の大国主に立ち、東出雲の杵築に再建した国

根の堅州国↓出雲日隈の拠点があった熊野大社・須我神社の近辺
 素戔嗚が建て直しにかかった国↓豊葦原中つ国

この和議の直後に、佐太国の不満分子が新しい嫡子の下に結集して権力を掠め取った。これに杵築国・闇見国・三徳国が肩入れして、葦原中つ国の囲い込みにかかった。

この嫡子は大穴持の名をもじって大己貴と称したり、杵築国の大国主を語るなどして出雲平野を瞬く間に席卷した。その後、田心姫を葦原中つ国の女王に担ぐや、その入り婿となって葦原家家長のごとく振舞っていた。彼が大国主と称した経緯はこうだった。

①大己貴の兄弟にあたる八十神は、それぞれが八上姫を妻にしたいと思っていたところ、八上姫が大己貴の妻になると決めたことで、大己貴を殺そうと図った。

②大己貴は八十神に追われて紀伊国に逃げたが、八十神がそこに迫ってきたので、素戔嗚のいる根の堅州国に逃げ込んだ。そこで、素戔嗚の娘・須勢理姫と出会って夫婦の契りを結んだ。須勢理姫が素戔嗚に、「葦原醜男です」と紹介すると、「これぞ勇者ぞ」と言って褒め称えられた。その後、大己貴は素戔嗚の寝入っている隙を見て、彼の生太刀・生弓など宝器をこっそり盗み取った上に、須勢理姫を背負って逃げ出した。

☆この時、大己貴は素戔嗚の奉じる八咫鏡、つまり日の像の鏡も手にしたらしい。

④目覚めた素戔嗚が跡を追って来たが、黄泉平坂を越えて逃げきった。

⑤素戔嗚はそこで、大己貴にこう言い渡した。

「大国主となって我が娘の須勢理姫を正妻に迎えると同時に、宇迦山の山本（出雲大社の地）にどっしりとした宮殿を立て、そこに住んでおれ」

⑥こうして、大己貴は東出雲に葦原中つ国を築くことになる。

『古事記』、「大国主、胸形の奥津宮に坐す神、多紀理姫命を娶して生める子は、阿遲スキ高日子根（味スキ高彦根）命。次に妹高姫命。亦の名は下照姫命。この阿遲スキ高日子根命は、今、迦毛大御神というぞ・」

☆大國主が正妻とした須勢理姫は、田心姫のことではない。『古事記』は宗像三皇女の多紀理姫（田心姫）が素戔嗚の養女で、しかも大國主の正妃としている。

★大己貴が根の堅州国から黄泉平坂を越えて逃げたとする記事を地図上で追ってみた。

素戔嗚の拠点⇨熊野大社・須我神社の近辺⇨黄泉平坂⇨大己貴の国、杵築国

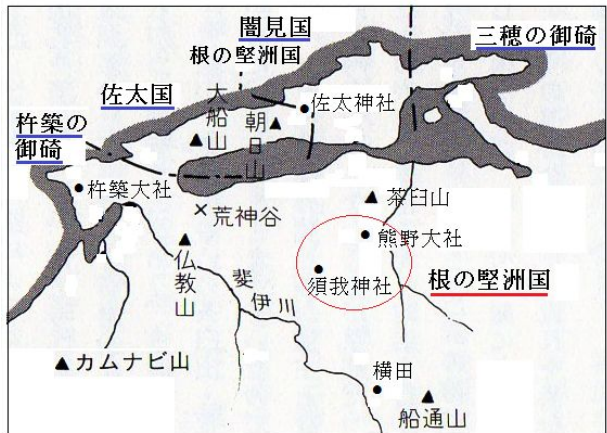
逆向きに、大乱に敗れた伊弉諾が逃げ走った足跡を追って見た。


黄泉国（闇見国）⇨黄泉平坂⇨出雲日隈の拠点
いずれの場合も根の堅州国は、出雲日隈の拠点⇨熊野大社・須我神社の近辺⇨意宇平野に落ち着く。

⑦その後、田心姫の入り婿となった大國主は、葦原家家長として振る舞っていた。彼の口は何事につけ常軌を逸していたから、葦原家の皆から、ずる賢い葦原醜男と陰口をたたかれ通しだった。

一方、田心姫は、五十猛を婿に迎える約束をあっさり反故にされたことで、

「宗像家は、厳之國、葦原中つ國、伊都國の宗家ぞ。大國主は田心姫が信頼する夫ぞ。約束ごとをあっさり踏みじった素戔嗚の言など、一言たりとも信用するでない」と言いふらして入り婿をかばったことで、葦原中つ國系の面々はうかつに手出しできなかった。



◆天日槍の来襲  新羅王子の天日槍は、宍粟邑で大己貴の奇策にはまって惨敗
大己貴↓天日槍の将兵八千と日矛を奪い、八千矛と語る。

天日槍の来襲時期↓赤壁の戦い（二〇八年）から二年あまり経った頃

☆二〇〇年、曹操は官渡の戦いで北の袁紹に圧勝した。孫堅の家督を継ぐ孫権も、揚子江の中・下流域から浙江にかけての地を固めつつあった。

二〇四年、南満州の公孫氏は北朝鮮に出兵して、名ばかりだった漢の支配地・楽浪郡を手にし、南の帯方郡（平城辺り）も開拓しにかかった。その際に韓や濊を討ったことで、韓は燕に帰属することになった。

①大己貴の勢いは止まらなかつた。安芸・吉備・丹波に出兵したかと思うと、次に播磨の伊和族・小千族を丸め込んだ。ついで越のオロチと盟約して北から邪馬台国を攻め立てた。

彼は配下の家長を片っ端から兼ねて、大国主・オロチ・葦原醜男・伊和大神と語っていた。これで、大穴持（大己貴）と名のる人物も二人が居て、この時期の歴史を煩雑にした。

当時、大己貴は素戔嗚の目論む豊葦原中つ国建て直しを邪魔したことで、天日槍の襲来に備えねばならぬ立場にあった。にもかかわらず、田心姫の娘・下照姫を彼の許に送っただけで、ことが足りたと安堵していた。

その後、大己貴は傲慢さが目に余ってきた。素戔嗚が日神に約束した国譲りを妨害したり、大物主をねらい討ちしたり、さらに日神だけが裁可できる墳墓を勝手に築くなどして、天下の掟をこれ見よがしに踏みにじつてきた。結果、山陰道と山陽道の方々に彼流の墳墓が築かれることになる。

☆二世紀の後半、山陰の出雲・安来・鳥取の各地では四隅の突き出た方形墳丘群が一斉に造

られた。その中には、最長六十五呎のものもある。吉備でも、一風変わった形の楯築墳丘墓が突如として出現した。

【楯築墳丘墓】（倉敷市）、径四〇呎、高さ五呎の円墳の左右に長さ二〇呎の方形部を備えていて、その全長は八〇呎に及ぶ。岡山大学の調査で、中央に木棺、その外側に木槨、木棺内に三〇キリ以上の朱が確認された。

墳丘墓の地には、細長い大石が楯のごとく乱立することで、この名がある。そこには吉備津彦にまつわる神社が鎮座していて、曲線模様や人面らしき模様が彫り込まれた石（縦横五〇キリ、高さ三〇キリ）がご神体として残る。これと似た模様のある孤文円板が纏向石塚古墳の周溝からも出た。

②赤壁の戦いから二年あまり経った頃、天日槍（天之日矛）が騎馬軍団八千とともに襲来したことで、大己貴はいきなり剣が峰に立たされた。彼が海を渡って来たには、理由があった。故国に逃げ帰った妻を連れ戻すこと、次に素戔嗚の不遇を耳にして大己貴征伐を決断したことだ。

彼は妻が国東（大分県）から瀬戸内海を渡ったと聞くや、播磨に襲来して、「妻を返せ」、「泊まる所がないから上陸させろ」と大己貴に迫った。

対する大己貴が、「娘は自分の所には居ない。天照大神お膝元の難波姫島に移った」と教えて彼の矛先をそちらに振ると、天日槍は脱兎のごとく難波へ急行した。

仔細を知った天照大神は、再びその矛先を大己貴に向けるべく使者を遣って、

「汝は誰か。いずれの国から来たのか」と問わしめた。すると天日槍は、

「私は新羅の王子です。瀛つ鏡・辺つ鏡・蛇の領巾・玉つ宝二つなど瑞宝五種、それに日矛、日の鏡など日隈神宝も持参して、義父を助けに参りました。

それに、お知らせしたい儀があります。呉は倭の所在を探り当てようと躍起になっています。

この際、呉に与して国難をかわすべきです」

と答えて呉との連帯を薦める一方、日隈神宝をちらちら見せて素戔嗚の児だと教えてみせた。

この時、天日槍の襲来を危惧した伊和族の女王・伊和津姫は、海べりの明石邑から内陸部の穴栗邑に疎開して、伊和軍全てを大己貴に託していた。天照大神は下照姫をそこに送りつけた上で、天日槍に向かって、

「大己貴征伐の暁には、穴栗邑から瀬戸内海に至る揖保川沿いを思いのままにしてよいぞ」と確約して戦をけしかけたのだ。天日槍はこの約定を引き受けた証しとして、無用化した瑞宝五種を天照大神に差し出してから、播磨に舞い戻って揖保川河口の砂洲に奇襲上陸した。

「垂仁紀」、「三年の春弥生に、新羅王子の天日槍来帰り。持て来る物は、はふと たま羽太の珠一箇・あしたか足高の珠一箇・うかか鶺鴒鹿の赤石の珠一箇・あかし出石の小刀一口・ほこ出石の杵一枝・ひのかがみ日鏡一面・熊の神籬一具、あわせて七物あり」

「応神記」、「天之日矛の持ち渡り来し物は、玉津宝と云いて、つら珠二貫。また浪振る領巾、ひれ浪切る領巾、風振る領巾、風切る領巾。また瀛つ鏡、つら辺つ鏡、あわせて八種なり（要するに、つら瑞宝五種）」

③ 迎え撃つ側の大己貴も負けてはいなかった。彼は大山祇軍・伊和兵・小千兵を駆り出すやら、児の八重事代主・鳥鳴海神勢を総動員するやらして播磨平野に撃って出た。負けず嫌いの大己貴は、

「必ずや熊野姓も日隈神宝も、さらに新羅の艦隊や騎馬軍団も奪って見せよう。葦原中つ国と熊野家双方の家督を手にする自分が、日隈神宝全てを貰い受けて当然であろうが」と豪語して、知恵と謀略を巡らせていた。

「わが軍は播磨平野で軽く一戦を交えた後は、敵に叶わぬと見せかけながら北へと潰走する。さすれば、敵は揖保川沿いの山道を無理押しして、宍粟邑に押し寄せてくる。当然、騎馬軍団の動きは鈍る。山間では一列縦隊を強いられる上に、梢や岩など避けて通らねばならぬからだ。その間に、わが方は間道をひた走って敵の背後や横に回り、敵の本陣めがけて突つ込むのだ」
出雲からも、遠路はるばる大歳神（素戔嗚の児）・大山咋神親子の軍勢も駆けつけて来て、兵力が一段と膨れ上がった。

④一見して、播磨平野での前哨戦は、揖保郡や神崎郡で勝負が二転三転するほどの激戦だった。この戦いの最中に、大己貴本陣の居場所が敵に漏れてしまった。彼は素戔嗚一門とともに、揖保川から市川・播磨平野を一望できる書写山南麓に陣取り、眼窩の林に主力軍を隠していた。それがいきなり騎馬軍団に蹂躪されたのだ。ついで、槍ぶすまを立てた歩兵三千に突つ込まれた。勝負はあっさり決した。大己貴はあちこちと逃げ回って揖保川にたどり着くや、そこから小船に移って北へ逃げ通した。彼は何度も反転しようと試みたが、そのつど敗北して宍粟邑に押し込められた。

『播磨国風土記』揖保郡、「粒丘。粒丘と号くる所以は、天日槍命、韓国より渡り来て、宇頭（揖保川）の川底に到りて宿処を葦原志挙乎命（大己貴）に乞いて曰わく、『汝は国主なり。吾が宿る所を得まく欲す』という。志挙乎、すなわち海中を許す」

宍粟郡、「奪谷。葦原志挙乎命と天日槍命と二はしらの神、この谷を相奪いたまいき」
神前郡、「梗岡は、伊和大神（大己貴）と天日槍命と二はしらの神、各軍を發して相戦いましき。・・八千軍と云う所以は、天日槍命軍、八千在りき。故れ、八千軍と曰ふ」

⑤天日槍軍が意気揚々と宍粟邑に迫って来ると、伊和族も大己貴一門も腹をくくるしかなかった。

その作戦会議では、騎馬軍団を一気に叩き潰す策だけが思案された。伊和族長老と大己貴、それに大山祇神が鳩首して知恵をしぼった結果、以下の対策を講じてから決戦に打って出るこ
とになった。

「三百頭を越える牛の角に松明と赤旗を縛りつけ、これを騎馬軍団めがけて突進させる。すると、慌てふためいた馬は、騎乗の武者を振り落として逃げ出すこと請け合いだ。転げ落ちた武者は鎧の重さで直ぐには立ち上がれない。その隙に、弓隊と槍隊が鎧の急所である、足裏や脇腹を狙って攻め立てるのだ」

この作戦にそつて、多数の弓隊や槍隊が編成され、石を運ぶ牛たちも残らず召集された。この仕掛けが整った将にそのとき、天日槍の騎馬軍団が遮二無二突っ込んできたのだ。

大己貴らの作戦は、見事に的中した。どの馬も突進して来る火牛を見るや仁王立ちとなり、武者を振り落とすが早いか逃げ散った。落馬した鎧武者はその場で弓隊や槍隊にあっけなく仕留められた。残る武者もことごとく生け捕りにされた。

その結果、大己貴は日隈神宝も新羅艦隊も、騎馬軍団も手にして、八千戈と名のつた。

『日本書紀』「大國主神、またの名は大物主神、または国作りの大己貴命と号す。または葦原醜男と曰す。または八千戈神やちほこと曰す」

【庭田神社（宍粟郡一宮町）の縁起】、「敵將は牛に乗せられ、村中を引き回された。大己貴は日矛・日の鏡など日隈八神宝と甲兵八千を手にして八千戈と名のり、この地で大いに祝杯をあげた」

☆これとは時代が異なるものの、この筋書きそっくりの縁起がある。

『予章記』大山祇神社（大三島、三嶋大明神の大山祇神・面足神を祭祀）に関わる記録、

「推古天皇御宇、百濟ヨリ鉄人ヲ大将トシテ日本ニ襲来リ、九州肥後ノ地ニ着クト風聞シケレハ、
おちのますみ
小千益躬勅ヲ蒙リ夷敵退治ハ家ノ先例ナリトテ、手勢少々率イテ九州へ発向ス。・・

其後、益躬ヲ案内人トシ數百艘ノ船ヲ率ヒ、中国指テ上リケル。程ナク播州ノ浦ニ着キケレハ、
鉄人ヲ馬ニ乗セ、須磨ヤ明石ノ裏山ヲ徐ニ歩シテ、・・益躬、蟹坂ノ辺ニテ、・・足ノ裏ノ矢所ヲ
見スマシ、思ウママニ（鉄人ヲ）射ケレハ、其ノ矢足裏ヨリ徹テ、頭ノ上三寸ハカリ染ミテ出ヌ」

【稲爪神社】（明石市大蔵谷）、祭神は、大山祇神、面足神、惶根命。併せて、伊和津比売大
神も祀る。神社の縁起よると、「推古天皇の御代、鉄人ぞろいの新羅軍が九州に攻めてきた。
伊豫の国司、小千益躬が「鉄人を撃退せよ」との皇命を受け、氏神の三嶋大明神（大三島の
大山祇神社）に勝利を祈ると、「鉄人の弱みは、足の裏にある」という神託が降った。

そこで益躬は、一計を案じて鉄人たちの道案内を買って出た。明石の浦に到り、鉄人たち
が休んでいた時、急に空模様が悪くなつて稲妻が飛び交い、雷鳴がとどろき渡った。すると、
どの馬は驚いて仁王立ちになり、鉄人を振り落として逃げ散った。益躬一党はこの時とばか
り、鉄人たちの足裏を狙つて矢を放った」という。

◆高皇産霊、高天原に現る  天照大神が高皇産霊と語つて高千穂宮に赴き、妻の日神を補佐
葦原中つ国平定の大義↓挙国一致して、外敵（遼東勢や呉軍）から国を守る体制づくり

①二一〇年代初め、騎馬軍団をこっそり手にした大己貴は、大物主の陣営だけを狙つて攻め立て
た。畿内の豊葦原瑞穗国が本家の豊葦原中つ国と袂を分かち、大物主にすり寄つたからだ。防
戦一方の大物主は負け戦が続いたあまり、大己貴を心底憎むようになった。日神も、大己貴に
豊葦原中つ国の建て直しや国譲りを妨害されたことで、怒り心頭に達していた。